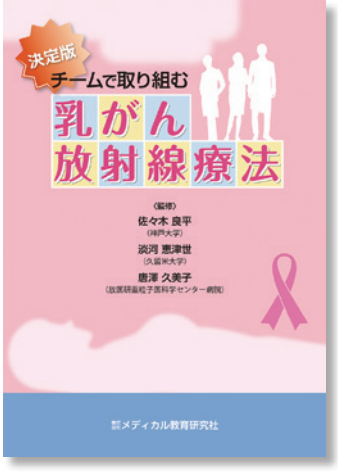
書評

『決定版チームで取り組む乳がん放射線療法』

日本私立学校振興・共済事業団
東京臨海病院　外科
鈴木 貴久



監修：佐々木良平，淡河恵津世，唐沢久美子
発行：株式会社メディカル教育研究社
定価：本体 3,810 円（税別）

あたかも洋服の流行のように，乳癌の治療も流行が繰り返されているように感じる。数年前まで化学療法一辺倒の治療であったのが，最近は内分泌療法（ホルモン療法）の重要性が再認識されている。手術に関しても乳房温存手術が2003年に胸筋温存乳房切除術の数を上回ったが，最近は乳房切除術がまた増えつつある。

乳癌の放射線治療もしかり。Fisherの全身病モデルが広く信じられるようになり，1970年後半にはPMRTはほとんど施行されなくなった。ところが1997年2つのRCTにより高リスク乳癌に対するPMRTで生存率も向上されることが示され，さらに最近では腋窩リンパ節転移1～3個の場合でもPMRTが勧められるようになった。

本書では第1章の冒頭『乳がん放射線量療法の歴史的変遷』でその辺りの歴史的流れがまとめられており，RoentgenによりX線が発見されから今日までの動きが解説されている。つづく『乳がん放射線療法の将来展望』で寡分割照射やAPBI（加速乳房部分照射）等の概説がなされ，今後の乳癌放射線治療の方向性が示される。その後各章にわたって最新データを示しつつ術後照射から再発治療，放射線の有害事象にいたるまで乳がんの放射線治療につき詳しく解説されていく。

本書はチームで取り組む乳がん放射線療法と題名にあるように，第4章『乳癌放射線療法のテクニック』は放射線技師に向け，第7章『乳癌放射線療法の実践看護』は看護師に向け，医師以外の専門職も興味をもって読めるよう構成されている。

各章ごとにやや内容が重複するところもあるが，男性乳癌の放射線治療や放射線治療後の二次がんといった話題まで，乳がんの放射線治療に関してはもう解らないことがないと思えるほどに内容が充実している。これらの知識を共有することはチーム医療の充実につながる。本書はまさに乳癌治療に携わる各専門職をチームとしてつなげる1冊といえよう。